

私たちのメメント・モリ

死を想う経験

日本福祉文化学会 研究委員会 編

阿比留久美, 石山 淳一, 岡村ヒロ子, 久保 美紀, 小山 伸子,
佐伯 典彦, 平島みどり, 服部万理子, 真柄希里穂, 結城 俊哉 著

2020年8月発行 日本福祉文化学会 80頁 A5判 定価880円



評・久保田治助 (鹿児島大学)

この書籍は、自分の死生観や身近な死の経験について、立ち止まって考えることがテーマとなっている。そして、様々な人がそれぞれの死について叙事詩のように、あるいは自分史のように、または過去の、あるいは未来の自分への手紙のように、それぞれが想う形で綴られている。

2017年2月の日本福祉文化学会の特別講演として、東京大学名誉教授の上野千鶴子氏が「死にゆく者の自律」という題目で登壇したことをきっかけとして、本学会の関東ブロックと関西ブロックで作られた研究会で行ってきた語り合いや学び合いから、ブックレットとして個人的な死への眼差しについてオムニバス形式で語られている。

当事者が経験した「死」に関する場面は、たとえば親や親戚、恋人など身近な人の死、医療現場での死、書籍から連想される死、終活としての自身の死、など多様な「個人的な」経験が数ページの短編として10数編で構成されている。しかしこの多様な死であるにもかかわらず、どの著者も文末において、受け入れがたい経験が昇華され、死を享受するような文面として筆が置かれている。最初は読者や

他者への語りのように文章が始まるのだが、最終的には、自分自身への問いのように文章が終末へと向かうのである。

そういう意味で、「個人的な」私の死の経験は、自分自身へのレクイエムのようにも思え、読者に不思議な共感や共有が生まれる。

さらに本書が特徴的であるのは、「おわりに」にある。コロナ前とコロナ禍の現在の2つの時期にまたがって書かれているのだ。全国・全世界におけるコロナ禍での死が、これまで以上にさらに緩やかに隣り合わせとなり、生活に柔らかく浸透し、「死を想う」ということが日常となって自覚化する社会となった。まさにこの現象についてあとがきで語っており、そのことに気づき、改めて最初から本編を読み返したいという欲求に駆られた。コロナ禍の現在では、著者たちの死の経験を別の見方で読み取ることができるのではないかと……と。

それぞれの著者の死にまつわる経験が淡々と語られているはずの短編的文章の数々が、むしろ今の時代に読者個人の心の中に深く染み込んでゆくという、この時代だからこそ多くの人に読んで欲しい1冊であるといえる。